

2024.5.5

No.239

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



空と友人と風景と 心をいやす3泊4日の旅

昨年11月、12月と、母と夫をいっぺんに亡くしてから4ヵ月。死後のさまざまな手続きを終えたら一気に寂しさが襲いました。銀河通信の読者や友人は札幌にもたくさんいるけれど、住んでいる所から少し離れてみたいと思い、調布のクッキングハウス会の行事に合わせて上京することにしました。

4月10日から13日帰宅までのお話です。その前に「人生の核心的両親を亡くし、空っぽになったという、樹木希林さんの娘也哉子(ややこ)さんが「人と出会いたいと切望した」と語って著した「BLANK PAGE 空っぽを満たす旅」に出会いました。



4.30 北邦野草園のカタクリ(JRで旭川まで行きました)

也哉子さんは「心と体にぽっかりとできた空白は、目を凝らすと、まるで台風のようにとてつもなく激しい雨が吹きすさんでいた」と記しています。

私は人に会いたい！と切に願っていたように思います。

快晴の4月10日、飛行機は羽田に向かいました。平日なので、席の隣は居ません。青い空と、東北の山々が美しく、天国に逝った夫と時には涙ぐみながら対話していました。初めて「最期の言葉が聞けなくてごめんね」と謝りました。

この日、渋谷で会ったのは齊木登茂子さん。実はここで、「宗教者平和ネット」の街頭活動にご一緒したいと考えていましたが、時間が16時からなのでそれまでの時間をコーヒーを飲みながら語りあうことが出来ました。平和運動に関わるようになったエピソードを紹介します。

「1978年4月に高校一年になった私の担任が、ひめゆり学徒の生き残りの上江田先生でした。そのことを知ったのは、高校三年で沖縄戦のことを習った時で

した。その後、10年以上後ですが韓国大邱市で日本語教師をしていた時、琉球大学の先生と出会いました。『是非沖縄に来て学んで下さい』と言われ初めて沖縄に行ったのが1994年。それからさらに12年後、娘が入学した中学に上江田先生が平和学習の講師にいらっしゃいました。なんとも奇遇でした。それ以来、沖縄には特別な関心を持ち機会があれば通っています。沖縄島から宮古島、石垣島、与那国島、また奄美大島への自衛隊の進出にも特別関心を持っています。

筆者が沖縄に関心を持ったのは、沖縄戦の時、狭いチビチリガマで暮らしていた人々が、米軍に殺されると思い込み集団自決したことを知り、1990年に家族で訪れたのがきっかけです。そのルポを銀河通信で紹介して、機関紙コンクールで優秀賞を頂きました。身近な自然を伝える通信は、平和もテーマになりました。

次に向かったのは、鎌倉市内で暮らす太田肇さん、朋子さん夫妻です。肇さんが新卒でNHK旭川支局に報道記者として赴任して以来の友人で、その後結婚した朋子さんは大学の後輩ですが、探検部で一緒だったとか。いきなり、大雪山にカメラを持って取材していた姿が記憶に残っています。40年以上の長い友人です。結婚後、肇さんはブラジルや、イラン、インドで活躍。朋子さんは銀河通信に、ブラジルだよりを20回以上に亘って寄稿してくださいました。ブラジルの人々の暮らしや今起きている事などのルポが素晴らしいです。野の花が似合う健康的でチャーミングな女性です。滞在中、鎌倉の山の傾斜地に自生するタケノコで料理を作ってくれました。北海道では味わえない取り立ての地味豊かな風味を味わいました。ブラジル便りは50号までの縮刷版に掲載しています。銀河通信をこんなに長く続けるとは思いもよらず、コピーした物を印刷したため、字も写真も鮮明でないのが残念です。

11日には大磯町にお住いの石川旺(さかえ)さんと、太田さん夫妻と魚料理が美味しいお店で食事しました。石川さんは大学ではメディア・ジャーナリズムを中心に講義していました。「定年後も関心を持ち続けているのは民主主義の実践・実現という目的に対して日本のメディアの現状はどうか、というテーマです。現状は惨憺たるものですが、問

題提起は続けます。大磯在住の作曲家長森かおるさんを取材しています。長森さんは戦没画学生の絵画を集めた長野県にある美術館をテーマにした組曲「無言館」の作曲家。現在取材編集を進めていますが、「無言館」にかなりの時間を割くことになりそうです。『今、私は何に向き合っているか ひたむきに時代とむきあって生きているか・・・』という問いかけの曲です。完成が楽しみです。

13日、帰りの飛行機に乗る前に、市ヶ谷でお目にかかったのが甲野恵美さんです。甲野さんは、定年まで小学校の教員、管理職を務め5年間外国人指導員を派遣する仕事をされ、63歳から人権擁護委員になり、中学生の人権作文コンクールの審査や、人権教室、隔月発行の「人権のひろば」の編集をされています。「書を愉しむ」のページを担当し、輪番で人権インタビューをしています。甲野さんは「中でも、極地探検家角幡唯介さん、心をを病んだ方と地域で食堂を開き、メンバーが心を開く学びの会などを実践されてきた松浦幸子さん、映画「あん」の原作者ドリアン助川さん、女優でイラン人として入管で苦悩を味わったサヘル・ローズさん、フェミニストの上野千鶴子さん、東京藝術大学副学長だった故松下功さんは強く印象に残っています。「人権のひろば」の編集会議は私の教室です」と語ります。

私も甲野さんから頂いた「人権のひろば」で上野さんが語った「老後の安心を確保するには年金保険、医療保険、介護保険の3点セットとお金では買えない人間関係」と語り、とても参考になりました。軍事費が過去最高の予算で、医療・福祉・教育など、大切な市民の権利が奪われていますね。私たちも声をあげていかなければと思いました。

時間を割いて会ってくださったみなさんから、「誠実に生きる」ことの大切さを改めて教えていただきました。

(みな子)

一緒に生きるための文化を創るクッキングハウスは希望の星



代表の松浦幸子さん

ある日のメンタルヘルス市民講座（写真はクッキングハウス提供）

私が調布市にある、クッキングハウスと出会ったのは松浦幸子さんの著書「不思議なレストラン」を読んで感銘を受けて、クッキングハウスにお手紙したのがはじまりです。北海道で、こんなユニークな活動をしている団体は聞いたことがありませんでした。

私もかつて、臨床検査技師として働いていた頃、精神科病棟に入院している患者さんと接する機会がありました。脳波検査ですが、検査室だけでなく閉鎖病棟に入る機会もあったので、思いを語れない、体を自由に

動かせないことの苦しみ伝わってきて、どんなにか普通に街で暮らせたらいいだろうと感じた日を思い出しました。

まずは賛助会員になり「クッキングキングハウスからこんにちは」の通信で生き生きとした取り組みを知りました。その後正会員になりクッキングハウスとの付き合いは20年ぐらいになるのでしょうか。私は松浦さんをはじめとして、スタッフやメンバーの皆さんが大好きになりました。メンバーのアイコさんは素敵な私の友人です。30周年と35周年を祝う大きなイベントに参加し、舞台上に立ったメンバーの寸劇や、スタッフも入っての自分たちで作詞した曲の数々の合唱に、涙が止まりませんでした。その記事は205号と232号に書いていますのでHPをご覧ください。

平和と人権と環境（原発等）を伝えたいと発行してきた銀河通信の歩みとクッキングハウスの歩みは重なるところも多く、私も「クッキングハウスからこんにちは」に励まされてきました。

通信には松浦さんの巻頭言にはじまり、スペシャルSST（ソーシャルスキルトレーニング）、家族SST、キミコ方式で絵を描こう、当事者研究会、リカバリーを語る会、火曜日のうたの会、コンサート、スウさんのピースウォーク等多彩な活動の感想がメンバーや参加者から寄せられていて楽しい。HPにあるようこそ！クッキングハウスへの案内の言葉が嬉しい。「自分とはかけ離れた世界のことでなく、隣にあることだ。もし自分の心が疲れてしまったとき、休ませてくれる場と、そのままのあなたでいいよと受け止めてくれる人と、失敗してもいいよと試してみられるチャンスがあったら、どんなに嬉しいだろう」

そのほかに自然派家庭料理のレストランやティールーム（手作りクッキー・ケーキのお店）も運営していて、地域の人たちに愛されています。（みな子）

<http://www.cookinghouse.jp/books.html>を是非ご覧になり賛助会員になっていただけたらと思います。問い合わせはクッキングハウス（TEL:042-498-5177）

スウさんのピースウォーク「自由を求め続ける」を聞いて



20回目の水野スウさんのピースウォーク。会場は東京都内だけでなく、遠方からの参加者も含めて40人近く

4月12日 スウさんのピースウォークで話す水野スウさん（撮影・みな子）

になりました。スウさんのお話は自由について具体的に語るの自分引き寄せて考える場になりました。

「自由を求め続ける」はクッキングハウスの松浦幸

子さんが提案した題目です。松浦さんは「自分だけが自由であっても嬉しくない、誰もが自由にならなければ」とクッキングハウスを始めた動機を語りました。

それを受けてスウさんは笠木透さんの歌の「ひとつぶの涙」とも、宮沢賢治「世界がぜんたい幸福にならないうちは…」とも通じてると話しました。

スウさんは能登半島地震で起きたことについて語り始めました。災害にあうとたんに自由がなくなる。水がないともどれほど自由がないか。能登でいまだに水の出ない所もある現実。水が出てトイレが使えない所もあり、新聞では伝わっていません。スウさんは支援が必要な所に援助をと募金は具体的に、クッキングハウスや、SNSなどで発信し続けました。私は日赤や、教会に募金はしましたが支援金がどのように使われるのか見える方がずっといいなと思いました

クッキングハウスのメンバーさんたちは、仲間とともに学んでリカバリーしていく中で、主体性を、自由を、とりもどしていったんじゃないのかな。自分の内なる偏見にも話し合うなかで気がついたかもしれない。スウさんのお話を聞きながら、クッキングハウスで私自身も学んだことを思い出しました。SSTに参加したのです。メンバーさんが、自分の思いを語れるってすごいって思いました。学習会に参加したメンバー一人ひとりが、的確に短く感想を述べる姿に「なんて知的な人たちなんだろう」と感動しました。話したいことは山ほどあるに違いない。でも一つにまとめる力は、クッキングハウスで培ったものだと思います。

話は地元のピースウォークに。今年で23年目のピースウォーク金沢。暴風雨警報の日だったけど、実行委員で話しあってなんとか開催する道を探ったよ。バナーを持って、音楽鳴らして街を歩くことは危なくてできなくても、いつもの公園に集まって、顔あわせて、公園内のウォークならできる。スピーチでは、能登のこと、ガザのこと、沖縄のことを語ってもらいました。それは、自由に平和を表現する一人一人の権利を守る、保持すること。今年はやめとこか、って簡単に手放したら取り戻すのはなかなか。そう思うからこそ、限られた状況の中でできることをと語りました。

主体性を持つって、自由って、自分で考えて決めて選ぶこと。ある意味めんどくさい。誰かに決めてもらった方が楽、ってこともあるよね。だけど、政治なんてむずかしいことわかんないから偉い人に決めてもらえばいい、って、みんながしたら？選挙のことだけじゃなく日常生活の中の小さな自由だって、自分で選びとってくって大切と思う。

災害の復興に、ほんとに必要なものは現場でしかわからない。憲法に緊急事態条項など書き込まれて政府の力だけ大きくなったら、今だって現地の声が届いてないのにさらに悲惨な状況になると確信してる。現場にもっと力と自由を。自由と平和はセット、だから自由も平和も求め続ける不断の現在進行形。自由って、誰かからプレゼントしてもらものじゃないから、不断の努力を日々普段から、12条する、ことがかかせないんです。

最後にスウさん作詞の「平和のひとかけら」を「ふるさと」のメロディでみんなで歌いました。♪知らないこと学んで 平和のひとかけらに 心の自由求めて 一歩前へ あなたと

憲法を暮らしに生かすお話でした。少し聞き取れない部分は、スウさんのまとめを参考にさせていただきました。(みな子)

反核医師のつどい10年ぶりに北海道で開催

北海道反核医師・歯科医師の会事務局長
塩川哲男



2023年9月23日 講演する川崎哲さん（撮影：北海道民医連新聞）

第33回「核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい」（以下、反核医師のつどい）が、昨年9月23日・24日の2日間、札幌市内で開催され、医師・歯科医師、医系学生をはじめ、全国23都道府県から151人、オンラインで40人が参加。「核兵器も核のごみもないピリカ・アイヌモシリ（美しく静かなる大地）を未来へ」をテーマに交流を深めました。

「ウクライナでのロシアの核兵器使用論台頭をふまえて核兵器使用をさせないための現状分析と日本の未来」と題して元外務省国際情報局長の孫崎享（うける）さんが記念講演。「核兵器禁止」と叫ぶだけではダメ、背景にある政治を知らなければ、実効ある反対運動とはならない。ウクライナ問題でロシア＝悪ウクライナ＝善と二分するのではなく、歴史的背景やNATO（北大西洋条約機構）の東方拡大の問題をみる必要がある。台湾有事、米軍の分析では米軍が負け中国が勝利する、その前提で台湾の人々は現状維持を志向している。日本から徒に危機を煽ってはならない。最後に今の自公政権に任せておいては戦争の危機は高まるばかりで、やはり政府を変えなければならぬと結びました。

実現可能な目標から一つひとつ実践を

「核戦争の危機のなかで核兵器のない世界をどうつくるか」と題して講演した川崎哲さん（ピースボート共同代表・ICAN国際運営委員）は2017年に採択された核兵器禁止条約（TPNW）と核不拡散条約（NPT）が補完しあって、核保有国が核を廃棄する道すじを作ることが大事だと述べ、日本は他のNATO加盟国のように、第2回TPNW締約国会議にオブザーバー参加すべきであることを強調しました。

「世界中の若い世代が核兵器のない未来を築こうとしている。シニア世代は自身の経験と、なぜ原爆が許されないかを伝えていく責任がある」と呼びかけました。

（同締約国会議は昨年11月末から米国にある国連本部で開かれましたが、日本政府は今回も参加しませんでした）

被爆体験を後世に

「被爆者運動の継承」をテーマに3人の方から問題提起がありました。まず廣田凱則さん（北海道被爆者協会会長）が北海道の被爆者は200人。被爆

者協会に所属しているのは35人で平均年齢は86歳。語り部ができるのは5人ほどと現状を述べました。つづいて川去裕子さん(被爆二世プラスの会北海道会長)が、同会が2017年に結成され、現在会員数約60人でうち被爆二世が22人、さまざまな活動に取り組んでいることを報告されました。3人目の渡部朋子さん(ANT-Hiroshima理事長)は、広島からオンラインで参加。広島における被爆者運動の継承と平和の創造と題して、ANT-Hiroshimaが行っている多面的な活動を紹介します。原爆症で12歳で亡くなった佐々木禎子さんの絵本「おりづるの旅」は世界各地の若者たちによって38言語に翻訳され読まれていることを紹介。国際的な取り組みを重視し、核なき世界を目指していることを報告しました。

このあと、フリータイムとなりましたが、別室で医系学生と若手医療者の交流企画が行われ、オンラインを含めて30名が参加しました。今回、医師や医学生に限定せず同じ医療者として枠を広げたことに大きな意義があったと思います。

沖縄を旅して～歴史を振り返って平和を考える 文と写真 高橋精巧(神戸市)



「基地のない平和で豊かな沖縄をめざす会」のメンバーと3月13日から2泊3日の沖縄の旅をしました。

沖縄で城(グスク)といえばまず、今帰仁(ナキ

ジン)城を思い浮かべます。土地の名にも中城(ナカグスク)村があります。沖縄本島でも按司(アジ=豪族・首領の意)による群雄割拠があり、南部・中部・北部と次第に統合され、最終的に南部・首里城の琉球王朝に統合されたことを学びました。その過程の一つが勝蓮城(上写真)だったのでしょ。うるま市から南東に伸びた半島の付け根にその城(グスク)はありました。

次に向かったのが、今回の旅で発見したのですが、バブル期に沖縄にできたリゾートゴルフ場が、今は廃墟となっています。うるま市石川東山地区にあった、ここ青山カントリークラブの跡地が「渡りに船」か、地元住民には説明もないまま、陸自ミサイル連隊の基地となろうとしていました。(その後、2024年4月に白紙撤回決定)

沖縄各地では、危険な普天間基地とは無関係に辺野古・新米軍基地建設の問題があり、離島では、宮古島、石垣島、与那国島には、自衛隊ミサイル基地が、建設され続けています。そのことばかりに気を奪われている中で、密かに進められていたのが、沖縄本島に建設されるミサイル連隊基地です。(このことは、宮古島市長選挙の応援に行ったとき知った、2017年宮古島におけるゴルフ場跡地・千代田カントリークラブが陸上自衛隊宮古島駐屯基地に代わったことと重なります。選挙は、自衛隊基地誘致についての賛否が争点でしたが、9587票対9212票の僅差で基地反対派が敗北しました)

名護市で最初に立ち寄ったのは、辺野古漁港にあるテント訪問でした。数年前まで、何度も訪問したとこ

ろですが、今は辺野古埋め立てエリアはテラポットと塀で見渡せなくなっていました。テント前の立て看板には『新基地建設阻止！闘争開始より8年(2639日)の命



を守る会の闘いとテント村座り込み7270日』と書かれていました。(上写真)そして、勝つためには、あきらめないこと、勝つまで座り続けることなどの言葉もありました。7270日は、20年に相当します。このテント村の前で、三線を奏でながら沖縄の歌を歌っておられる沖縄出身の女性がおられました。かつては、大阪方面におられたことから、どこかで、お目にかかったことのある懐かしい方でした。

そして、ゲート前の座り込みですが、座り込んでいる人数の少なさに比較して某大手警備会社の警備員の過大なことには警備費が2000万円/日と、血税の無駄使いを感じました。無駄使いの本命はゼネコンによる辺野古ヘドロ海の埋め立てなので、ゼネコンも警備会社などに支払われる税金の浪費は、その背後にいるメガバンクや大資本、そして、一部が与党議員へのパーティー献金などなるのでしょうか。抽象化すれば、何れもゼネコンが儲ける「公共」事業としては、2020東京オリンピックを起爆剤としてスタートした首都圏における神宮外苑の巨大開発、2025関西万博を起爆剤としてヘドロの島・夢洲のカジノ・IR統合リゾート開発、東日本大震災・津波による巨大防波堤の建設と、高台移転、福島原発事故の除染、原発の安全対策工事なども、すべてゼネコンが儲かる構図で進められています。基地のない平和で豊かな沖縄をめざす会のニュース「おきなわ」に原発問題が取り上げられることについて、共通点が秘められていることに気づきます。

辺野古ゲート前はバスで通り過ぎたのですが、埋め立て土の搬出場所・安和では、ダンプの通行を少しでも遅らせる牛歩行動もしました。交通整理をする警備員も、ダンプのドライバーもいら立つことなく、互いを理解し合っている様に映ります。ひょっとして、沖縄の人も(本土の人も)、基地など無いことを願っているのだと感じたことから、この闘いは最後に勝利するのではと、気の長い希望を持ちました。

様々な発見のあった今回の「沖縄の旅」でしたがこれを機に、沖縄の問題は、日本全体のローカルの問題と合わせて、更なる関心を持っていかねればと心に誓いました。那覇に帰ってからの最終日、何度目かの訪問となった「不屈館」では、沖縄人民党・瀬長亀次郎さんと、伊江島で反戦運動に身をささげてきた阿波根(アハゴン)昌鴻さんが、豊見城村病院の同一病棟で、ベッドが隣同士となっていた写真(新聞記事の展示)を目にしました。

沢知恵さんのコンサート ハンセン病市民学会全国交流集会 in北海道によせて 秀嶋ゆかり（弁護士・札幌）



ハンセン病問題との出会いは2001年5月の熊本地裁「旧らい予防法」国賠訴訟の判決報道だった。その年の10月に札幌弁護士会の人権擁護委員会で、青森県内の国立ハンセン病療養所松丘保養園を訪問した時の衝撃や様々な思いが今も鮮明によみがえる。

私の中で、忘れがたい当事者（ハンセン病は完治しているが、社会での生活に戻れない方々が殆どであり、「回復者」と呼ばせていただく）の言葉がある。「自分は赤ちゃんを抱いたことがない」—強制隔離と旧優生保護法による強制不妊手術を、これほど端的に示す言葉があるのか。現行憲法の下で、法に基づき患者の権利が蔑ろにされたばかりか、熊本地裁判決が「人生被害」と認定した強制隔離政策を、国、自治体、市民が推し進めた経緯は、今なお日本に人権概念が十分根付かない根っこを差し出している。私たちと交流を重ねてくださっていた回復者の方々が、この間も次々と亡くなっている。

歴史の当事者としての思いを受け継ぎたい、との一心で、第18回ハンセン病市民学会in北海道を開催する。1人でも多くの方が、二度とこのような人権侵害を重ねてはならない、とのバトンを受け取って帰って欲しいと願う。

沢知恵さんのことは、中川明弁護士が関わった日曜日授業参観訴訟の原告であったこと、シンガーソングライターとして活動されていることまでは知っていたもののハンセン病療養所の「園歌」やハンセン病回復者であった塔和子さんの詩をうたう等の活動を続けておられることやその思いを知ったのは昨年、朝日新聞に大きく取り上げられた時だった。この記事に接し、沢さんの歌や言葉を聴いてみたいと強く思っていたところ、今回、自由学校遊に繋がりのある方々から、沢さんのコンサートをやらないか、という声かけをいただき、二つ返事で「やりましょう」となった。

財政基盤はないが実行委員会を立ち上げた上、何とか資金集めをして、素敵なおコンサートにしたいと、今から希望と期待を膨らませている。

ハンセン病問題を、沢さんの歌や語りを通じ全身全霊でとらえる希少な機会ですので、是非、万障お練り合わせのうえ、コンサートにお越しください。

購読料と寄付をありがとうございます
(敬称略) 2024. 3. 2~5. 1

高橋春枝 神原照子 高橋雫 伊藤功 岸裕子 富田素實 江尾寄弘子 西村武彦 松浦幸子 反橋一夫 佐藤正人 塩川哲男 久野真紀子 吉田雅子 堀 泰雄 柴崎徹 福原正和 藤田とし子 谷井利明 波 瑠美子 竹内修一 田村陽子 安田成男 鈴木訓 荒井喜美子 仲俣善雄 木村玲子 黒尾和久 中島圭子 白鳥真理子 富永雅子 吉原あつ子 谷中寿子 西村恭子 赤木恵子 水野スウ 太田肇・朋子 山本葉子 室崎和佳子 西村敏子 佐々木睦子 合田美津子 二階堂初代 購読料とカンパ136,00円は印刷と送料に使わせていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2,000円(郵送読者)をお願いします。先日調布に行きクッキングハウスで9人も読者が増えました。ありがとうございます。

ハンセン病を生き残った人のうた 沢知恵
ピアノ弾き語りコンサートのご案内

2024年7月13日(土) 15:00開演
14:30開場
札幌北光教会4階チャペル(札幌市中央区
大通西1丁目 テレビ塔南向かい)
一般前売 2,500円
当日 3,000円
25歳以下 2,000円 全席自由
チケット取り扱い 道新プレイガイド
オンラインストア・窓口・電話
0570-00-3871
セコマコード: D24071302
印刷通信読者にはチラシを同封します。

2024年2月4日、小川晶(あきら)さんが群馬県会議員を辞職して、当選は難しいと衆目が一致していた前橋市長選に無所属新人で立候補。初当選しました。



前橋市の堀泰雄さんから、小川さんを祝福したイラストと詩が届きました。

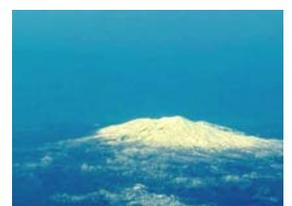
鯉のぼりに託す願い 堀泰雄

「あれあれ、順序がおかしくない？」
「本当だ、緋鯉が上で真鯉が下だ」
その感覚がおかしくないか？
群馬は「かかあ天下一」
働き者のおっかあが、
群馬の経済支えてる
保守王国の前橋に
民主政治を訴える
女性市長が誕生だ
緋鯉が上で当り前

我が家の向かいは小学校
訴えたいのさ私は
「女の子たち頑張れよ、
今や女性が上に立ち
世界を引っ張る時なんだ」
気が付いたかなこの気持ち、
鯉のぼり高く掲げてじいさんは
皆の活躍願ってる



4.10渋谷ハチ公前での平和集会



4.10 飛行機上空から見た鳥海山

本 Books

熊狩りの描写が圧巻

ともぐい

河崎秋子著 新潮社 1,925円

直木賞を受賞した河崎秋子さんの「ともぐい」が最近読んだ本では抜群の面白さでした。

明治後期の北海道の道東が舞台です。山奥で犬を相棒に熊や鹿を狩猟する熊爪が主人公です。獣への臭覚に圧倒されます。ある日冬眠しない「穴持たず」がやってきます。穴持たずと赤毛の熊との死闘に、熊爪は巻き込まれるのです。

河崎さんは羊飼いならでは動物の観察と自然描写はまるで映画を観ているような臨場感です。熊爪は重傷を負い、街で獣の肉を買う商人に助けられます。山に帰ってきた熊爪は山の王者の赤毛に立ち向かう。

街で好きになった陽子(はるこ)を山に連れて帰るが、想像を絶する幕切れを迎える。この部分は賛否が分かれると思いました。

熊爪はむやみやたらに獣は殺さない。自分が生きるための分だけです。山の風景の描写が美しくスケールの大きさを感じました。熊爪、陽子、熊たちの業と悲哀に心揺さぶられました。

匂い、音や気配が眼前に立ち現れる臨場感に圧倒されました。生と死の狭間であがく人間の生き様がひたすら眩しい。

私の祖父母は淡路島から日高の山奥に入植した開拓農民です。農耕馬をたくさん飼っていましたが馬への愛情には目を見張るものがありました。熊にも遭遇したことはあると思います。でも刺激はしない方法だったと思います。祖父母の自宅近くで私は蛇に何度も出遭いましたが、祖父の教えは「石を投げたり、いじめるな!」でした。

河崎さんが描く北海道開拓の歴史を今後も期待しています。(みな子)



歌に込められた平和への誓い

漫画 幸せなら手をたたこう 誕生物語

西岡由香・作 木村利人・監修
いのちのことば社 1,540円

この曲を作詞した木村利人さんが大学院生時代にフィリピンの農村でボランティアをしていた時です。木村さんは現地で「日本へ帰れ」とか「死ぬ」と言われたという。第二次世界大戦で日本兵に村を焼かれ。家族を殺された大きな傷がフィリピンの人にはありました。現地で「初めて日本が加害国だったと知った」木村さんは「心の中で申し訳ないと思っているだけではだめだ。態度で示そう」。身を粉にして、ボランティアで汗を流したという。その思いは徐々に浸透し、仲間として、受け入れられるのです。

一人だけ仲良くしてくれた青年がいました。彼の

市民の命が最優先であってほしい

なぜ日本は原発を止められないのか?

青木美希著 文春新書
1,210円

3月に青木美希さんの講演を聞きました。

浪江町の帰還困難区域に取材に行かれた時の映像を見せて下さいました。そこでは、事故から11年後でも、ピーピーと鳴り続ける線量計の音が響いていたのでした。今も原発事故が終わっていないという現実を突きつけられた思いでした。さらに、処理しても放射能による汚染を取り切れていない水の海洋への放出が始まりました。約束を反故にされた漁業関係者の方々の怒りの声は無視されたのです。

福島第一原発事故後、脱原発の声が広がったはずなのに、政府は原発回帰の方針を掲げています。今年1月に能登半島地震が起きて、停止していた志賀原発で、多数のトラブルが発生していたことが分かりました。新聞はあまり報じていません。しかも老朽化した原発を60年を超えても稼働させようとは信じられません。何故なのか。この本を読んでよく分かりました。政・官・業・学が安全性よりも利益を重要視し「原発安全神話」に加担し続けていることに怒りがわきました。

原発政策に予算を取られて、再生可能エネルギーへの予算に回らないため技術も研究も普及も進みません。

私は2011年3月の福島原発事故のすぐ後に台湾に行く機会がありました。ハンセン病回復者が暮らす療養所を札幌でハンセン病の人権問題に取り組む仲間と訪れました。私たちは、原発の被害者ではないにも関わらず、「大変な事故でしたね。台湾でも「原発計画を中止させよう」と市民運動をしています」と言われました。私も「泊原発の廃炉をめざす会」で原告として廃炉を求める裁判で闘ってます。台湾の3000人を超える市民デモはニュースで知りました。原発建設を止めたと聞いています。

地震大国である日本において、原発の安全性を確保することは不可能。気づいていながら、脱原発ができないのは、利権問題が一番の理由。東日本大震災後、原発を続けることを前提にして作られた規制基準は”世界で最も厳しい水準”らしい。M6以上の地震の2割が日本で起きています。避難計画は審査していないとか、危険度の高い集中立地も規制されないままなのはなぜですか?

東日本大震災による事故の後、ドイツは脱原発を決定したのに日本が変われないのは、既得権益にしがみつく電力会社と関係者だと青木さんは鋭く追及しています。

青木さんは記者ですが、マスコミも真実を伝えてないと告発。是非多くの人に読んでほしいです。青木さんの講演会も是非企画してください。(みな子)

優しさにどうにか応えたいと思ったとあります。理解し合い、赦し合うことへの希望を込めて作詞をしている時に心に浮かんだのが聖書の詩編47でした。詩編には「すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かって喜び歌い、叫びをあげよ」とあります。

木村さんは地元ラジオ番組に出演し、日本の「平和憲法」を紹介もします。「幸せなら手をたたこう 幸せなら態度で示そうよ」。思わず口ずさみました。

作者の西岡由香さんは長崎を拠点に原爆や戦争、歴史をテーマにした漫画に取り組んでいて「週刊金曜日」で4コママンガ「さらん日記」を連載中です。(みな子)

憩いの場の復活を願って **あさいち**



絵：大石可久也 かたり輪島
・朝市の人々
福音館書店 1,100円

石川県「輪島朝市」の活気ある風景を描いた1980年刊行の作品。朝市は人々にとって楽しいおしゃべりと交流の場です。

2024年元日の能登半島地震で大きな被害を受けた被災地の、一日も早い復興への願いを込めて復刊されました。おばあちゃんたちの生き生きとした会話が聞こえてくるようです。豊かな朝市をとだえさせてはならないと思います

本作品の利益は能登半島地震災害義援金として、日本赤十字社を通して寄付されます。どうぞご支援をお願いします。(みな子)

映画 「原爆の父」が抱える苦悩と孤独



『オッペンハイマー』

クリストファー・ノーラン監督



「原爆の父」として知られる米国の物理学者オッペンハイマー(キリアン・マーフィー)の栄光と苦悩と挫折を描いた作品です。アカデミー賞を作品賞、監督賞など7部門で受賞。しかし日本では受賞前の上映はありませんでした。

戦時中、核開発リーダーに選ばれたオッペンハイマーは、砂漠のロス・アラモスに街を作り、有能な科学者を大勢招いて原爆開発に突き進みます。ナチスドイツに先んじて原子爆弾を開発するように政府から命じられますがナチは降伏。しかしマンハッタン計画は続行されるのです。オッペンハイマーの周囲には大勢の知性が渦を巻いていたのにも関わらず開発は止められなかったのです。クリストファー・ノーラン監督はそこをきちんと描いていてオッペンハイマーの苦悩が伝わってきます。

映画は1954年の原子力委員会の聴聞会から始まり過去を回想する構成です。カラーシーンとモノクロシーンが使い分けられ戦中戦後、栄光と悲劇(苦悩)の場面を行ったり来たりするので背景を知らないと戸惑います。私は、鑑賞後、パンフレットと著書を買ひ確

かめました。

戦後に待っていたのは、冷戦下、共産主義者を弾圧する赤狩りの嵐でした。オッペンハイマーは水爆開発に反対し、ソ連のスパイ容疑で聴聞会で追及され、公職追放されるのです。

彼が成したことは何だったのか。オッペンハイマーを冷静に見つめています。過去を描きながら、今を、さらに未来を予言しているかのようです。広島・長崎の原爆被害が描かれていないと批判もありますが監督は、アインシュタインに語らせる場面で、深い思慮を感じました。オッペンハイマーがただ目を背けてうつむく様子を見せるだけ。見ようとしないオッペンハイマーの姿は見ようとしないアメリカの姿であり、その後を見ようとしない世界を暗示しているかのようです。監督自身の反核の意思が伝わってきます。オッペンハイマーは国の英雄となったその瞬間でさえ、自身を罪人として意識していました。科学の勝利などはすぐに吹き飛び、人として許されない重い罪を自覚した彼は水爆開発に強く反対するようになります。

科学者は絶対に政治に利用されてはならないと思いました。オッペンハイマー演じるキリアン・マーフィーの演技が素晴らしかったです。没入感がすごくて長尺なのに想像を絶する臨場感に圧倒されました。音響と映像美で原爆がいかに壮大で恐ろしい物であるかを改めて思い知らされました。鑑賞中は、核の恐怖に人類が今も晒されている危険を改めて考えさせられました。これは映画館で見るべき映画です。私は2回観ました。(みな子)



命がけで記録した ロシアの侵略行為

『マリウポリの20日間』

ミスティスラフ・
チェルノフ監督

2022年2月24日、ロシアは隣国のウクライナへの侵略を開始しました。標的の一つがアゾフ海に面する工業都市マリウポリでした。

この映画の監督でAP通信のウクライナ人記者ミスティスラフ・チェルノフら、ロシア侵攻開始の1時間前に現地入り、3月15日に脱出するまでの記録です。

ロシア軍の容赦ない攻撃により水や食糧の供給は途絶え、通信も遮断され、またたく間にマリウポリは孤立していく。海外メディアのほとんどが現地から撤退するなか、チェルノフたちはロシア軍に包囲された市内に留まり続け、戦火にさらされた人々の惨状を命がけで記録し続けました。

その残虐さは目を覆うほどでした。産科病院への攻撃は人間の行為とは思えないほど。骨盤に重傷を負った妊婦が担架で搬出されてきました。取材陣は映像に収め、即座に世界に伝えたのです。この映像にロシアは「役者が演じたフェイクニュースだ」と報じたのです。別の病院に移送された妊婦は胎児が死亡したことを知り、「殺して」と叫んで亡くなりました。死体が累々と大きな穴に埋められていくシーンや、ロシア軍の攻撃で破壊された店の商品を盗む市民も写しだされます。通信手段をロシアに切断されて住民には誰が爆撃しているのかも分からなかつ

たのです。マリウポリの死者数は約25000人と推定されるが実際の死者数はこれを大きく上回るだろうと映画の最後に流れます。

この作品は包囲下の人々が経験した痛ましい惨劇の記録であり、同時に紛争地帯からの報道がどのように行われていたのか、報道によって世界に対してどんな影響を及ぼしたのかを知る機会を与えてくれました。チェルノフ 記者は「歴史を変えることは出来ない。しかし歴史を記録し、真実を明らかにし、マリウポリの人々や命を奉げた人々が決して忘れ去られないようにすることができる」と語りました。

私は戦争の残忍さに自分が遭遇したような痛みで涙が止まりませんでした。日本も軍事費が議論もされぬままに増え続けています。戦争はしないと9条でうたっていることを肝に命じてほしい。(みな子)

軍事化が進む沖縄 ・南西諸島

戦雲 (いくさふむ)

三上智恵監督



三上智恵監督6年ぶりの新作。『標的の村』で沖縄本島が分断される様子を撮り続け、沖縄の基地問題を問いました。今回は沖縄本島、与那国島、宮古島、石垣島、奄美大島などをめぐり取材を続けてきた三上監督による渾身の最新レポートです。

かくしゃくとした山里節子さんが「戦雲がまた湧き出てくるよ。おそろしくて眠ろうにも眠れない」という歌が現実で起きていることを伝える。それは私たちへの問いかけです。

メディアでは報じない急速な戦力配置が進む沖縄・南西諸島が描かれる。2022年には、台湾有事を想定して、九州から南西諸島を主戦場とし、現地の人々の犠牲を事実上覚悟した防衛計画が露わに。しかし、その真の恐ろしさを読み解き報じるメディアはほとんどありません。

沖縄本島から西に最も遠い「与那国島」などは、沖縄本島よりも台湾の方にはずっと近いのです。カジキ漁の海人、川田さんは、最初は自衛隊が島を守ってくれるならいいじゃないか、と言っていた。しかし、時間とともに、軍事要塞化が進み、ついにはミサイル基地となっていく島の様子に意見が変わっていきます。

カメラは住民の反対を押して基地に対艦ミサイルを運び込む様子や、島が戦場になった時の避難計画の説明会をとらえます。山里さんが語り部として「南西諸島を戦争の玄関口ではなく、平和で友好的なアジアの玄関口にしたい」と語ります。ナレーションが三上監督と山里節子さんのふたりであることもまた、この映画をぐんとリアルに、島々の肌感覚を生々しく伝えてくれました。

沖縄に古くから伝わる行事、エイサーやハーリー(カヌー競争)も映し出す記録映画にもなっていて、島人たちの言葉が心に残りました。(みな子)

野の花を楽しみました



4月30日 春の花を楽しみたくて、旭川までJRで出かけました。日本山岳会で一緒に山に登った黒田忠さんに

北邦野草園に案内していただきました。写真はオクエゾサイシンで花は葉の間から出る長い柄の先につきます。



左・サンカヨウ 右・シラネアオイ



野草園の小川ではエゾノリュウキンカがたくさん咲いて、そのそばでチセの修復が行われていました。



スプリングエフェメラル(春のはかない命)のカタクリとエゾエンゴサクの群落

